令和４年度第２回明石市文化財保護審議会次第

日時：2023 年（令和５年）２月 20 日（月）午後３時 30 分～４時 30 分

場所：明石市立文化博物館　１階小展示室

１．開会

２．議事

（１）　指定文化財候補物件について（審議及び答申案の検討）

・旧大久保本陣母屋

・弁財船模型

・中崎公会堂

（２）　その他

・今後の流れ

３．閉会

明 文 ス 第 1 2 6 8 号
2023年(令和5年)1月12日

明石市文化財保護審議会
会長　冷泉　為人　様

明石市長　泉　房穂

明石市指定有形文化財への指定について（諮問）

明石市文化財保護条例（昭和41年条例第30号）第19条第1号の規定により、下記のとおり諮問します。

記

1　諮問事項　　明石市指定有形文化財への指定について

2　対象文化財

(1) 旧大久保本陣母屋

(2) 御厨神社所蔵弁財船模型

(3) 中崎公会堂

2023年(令和５年) ２月20日

明石市長　　泉　　房　穂　様

明石市文化財保護審議会
会 長　　冷 泉　　為 人

明石市指定有形文化財への指定について（答申）（案）

令和５年１月12日付け明文ス第1268号で諮問のありました標記の件について、下記のとおり答申します。

記

諮問のあった明石市指定有形文化財の指定については、別記の内容で市指定とすることを妥当と認めます。

以上

記

1　対象文化財

（1）名　称　　旧大久保本陣母屋

所在地　　明石市大久保町西脇 412

所有者　　西光寺

時　代　　江戸時代

形　状　　木造厨子二階建、妻入

間口 12.77m、奥行 12.79m

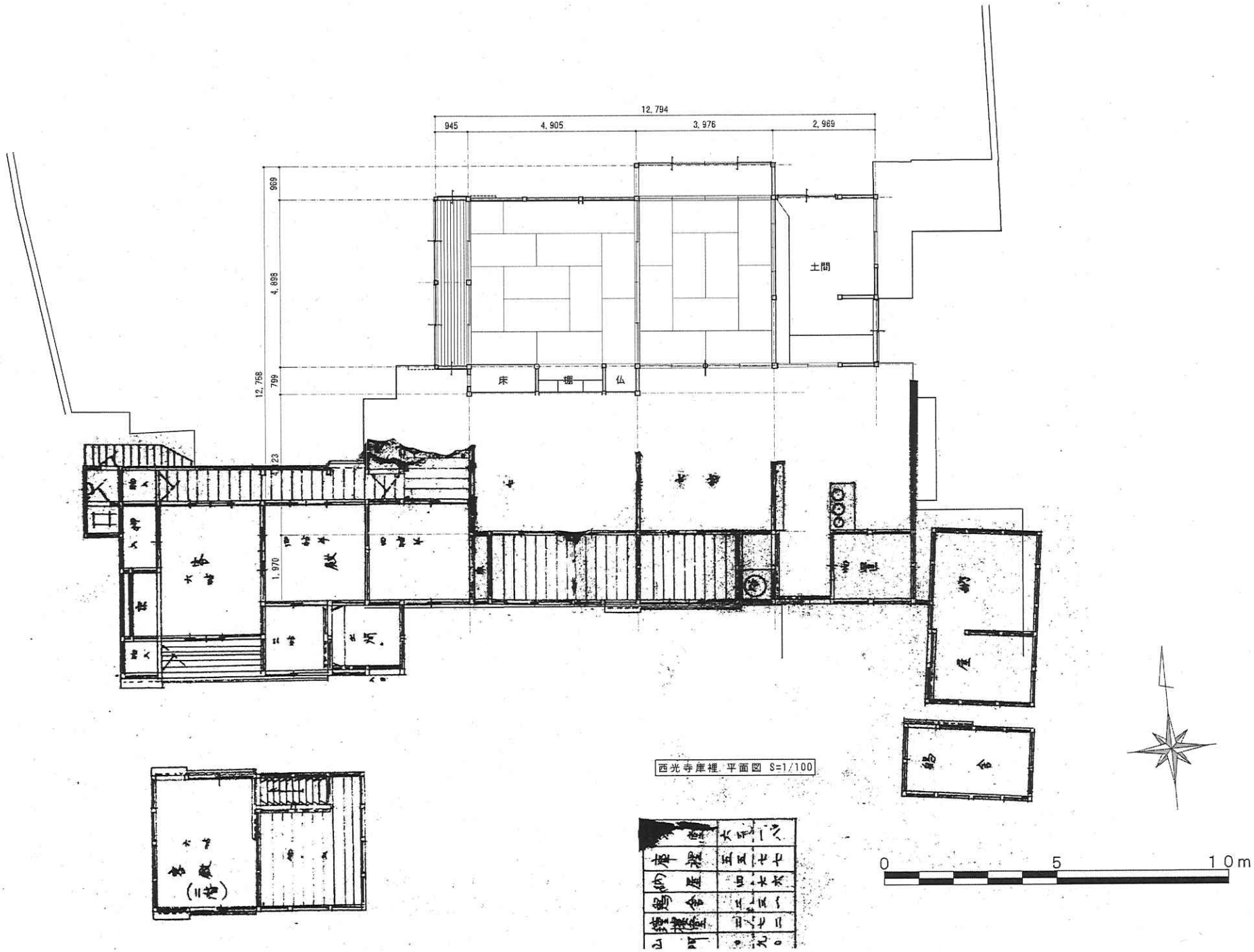
屋根　切妻桟瓦葺

内部　土間、10 畳の間、上段の間（12 畳）

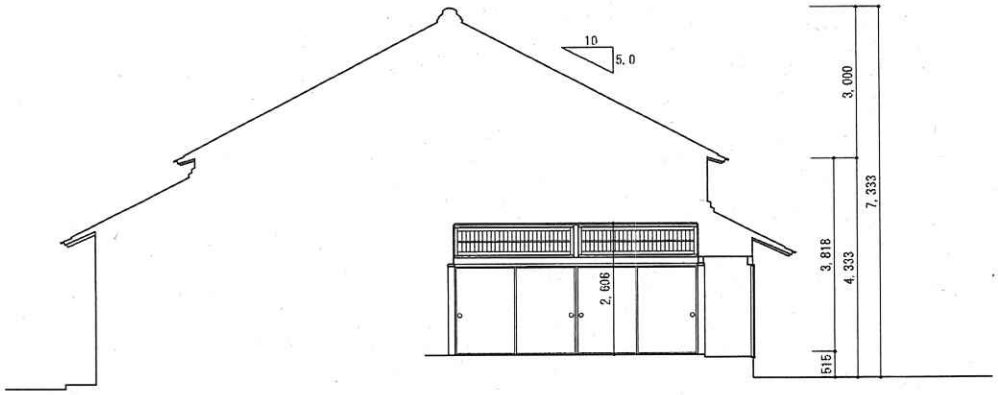
概　要　　大久保本陣は現在の大久保町大久保町、旧西国街道沿いにあった建物である。大久保町に本陣が設けられたのは、播磨国領主池田輝政の頃の慶長 5～18 年（1600～1613）で、江戸時代には西国街道は大名の参勤交代などで賑わい、第 6 代明石藩主松平信之のころの記録には、「本陣　安藤助太夫」との表記が見られる。明治 3 年（1870）に本陣や脇本陣が廃止され、本陣は村役場になり、明治 45 年（1912）に取り壊され、門は東東光寺、母屋は西脇の西光寺に移築されたと伝わる。

西光寺の庫裏は、木造厨子二階建である。屋根や内部は改変が加えられているが、基本的な構造軸組と空間構成は江戸時代の様式が残されている。特に、上段の間は 12 畳あり、床の間を設けている。通常の本陣の上段の間は 8～10 畳であるが、それらより規模が大きく、また、欄間の格子も武家好みの意匠となっている。

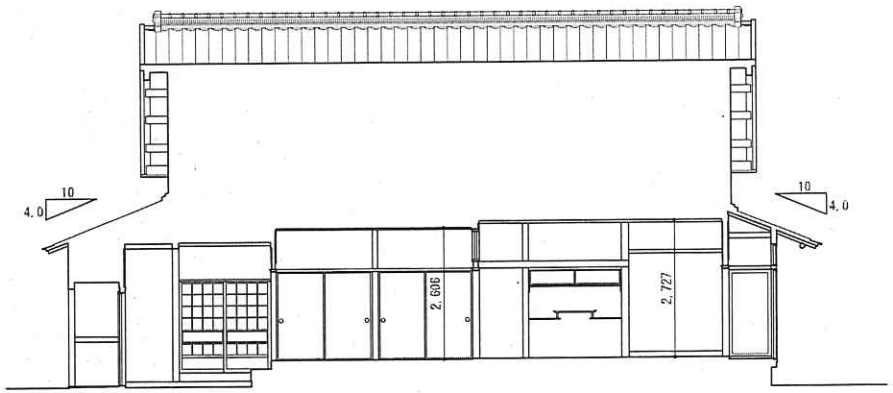
江戸時代の本陣母屋の姿を示すものとして文化財的価値が高い。



西光寺庫裡 平面図 S=1/100



A－A断面図



B－B断面図

西光寺庫裡 断面図 S=1/100

西光寺山門

西光寺庫裏

西光寺庫裏

西光寺庫裏

西光寺上段の間

西光寺欄間

（2）名　称　　弁財船（イサバ）模型

所在地　　明石市二見町東二見 1323

所有者　　御厨神社

時　代　　江戸時代（天保年間）

形　状　　全長　208 ㎝　　幅　65 ㎝　　高さ　25 ㎝

船底裏に奉納者名と奉納時期有

概　要　　天保６年（1835）６月に明石市東二見村と西二見村の船持ちたちによって御厨神社に奉納された弁財船（イサバ）模型である。船底裏側に奉納者や製作者の名および奉納時期が記されており、全体的に当時の形がよく伝えられている。

とくに船首部分は残りが良く、小廻船の特徴であるミヨシと馬乗立の部分が二股になる特徴をもち、ミヨシと馬乗立の間には飾り彫板（梅等の模様）がついている。

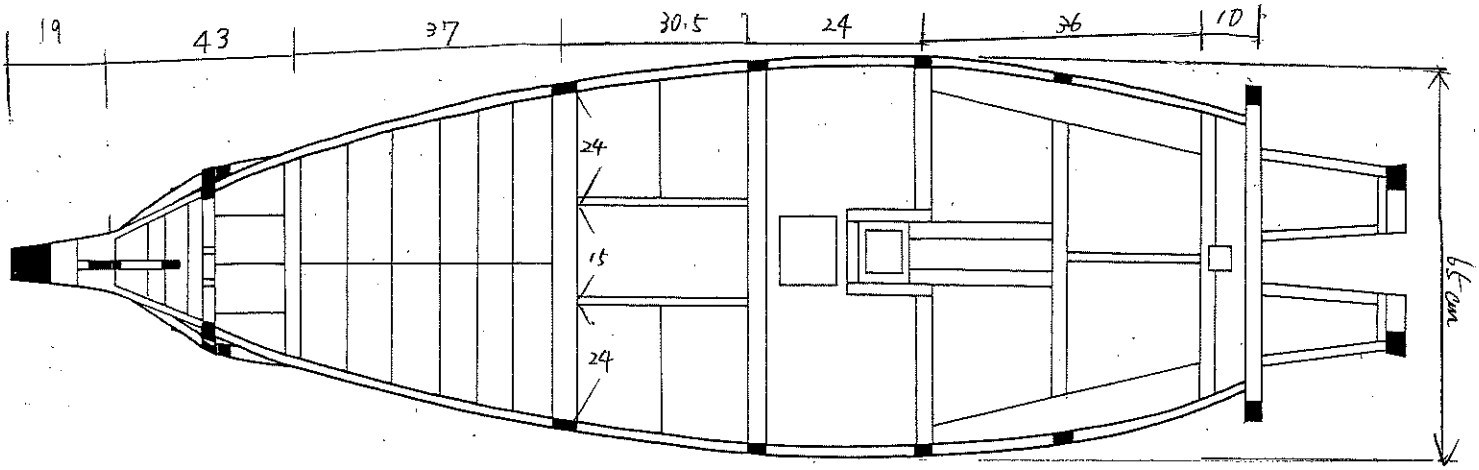
本奉納模型は、大型弁財船（千石船）にはない、全国でも数少ない小廻船（イサバ）の特徴を有し、奉納年代も「天保六年（1835）六月」と相対的に古い。

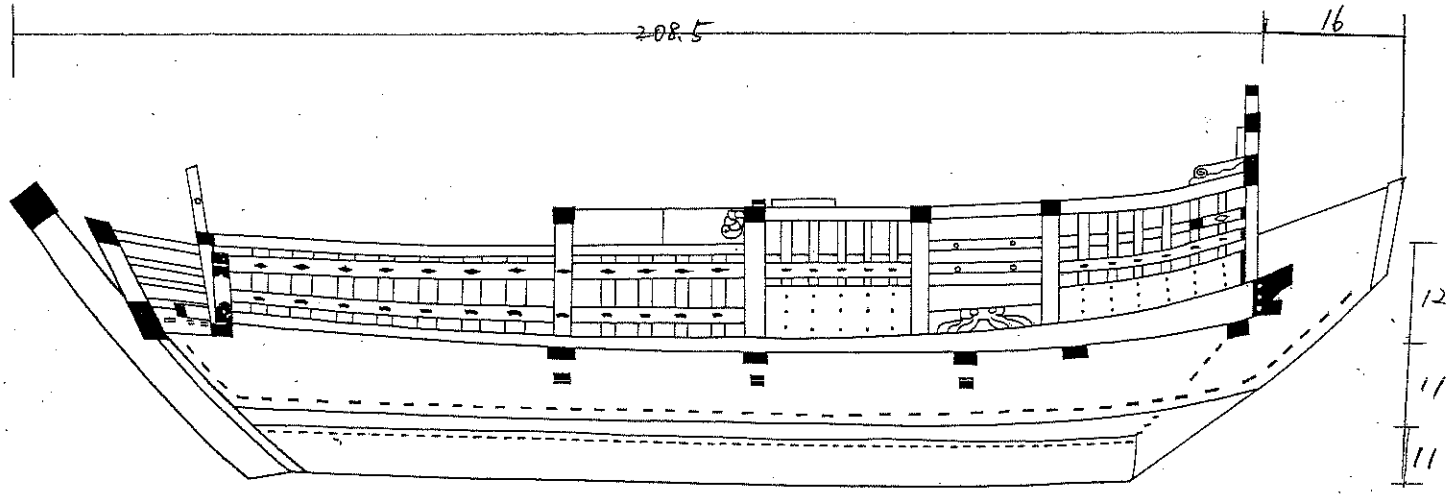
このタイプの船は基本的に魚類や薪等の荷物を運んだ船であるが、大坂から金毘羅参りの客も運んでいたと考えられる。大坂には二見出身の旅籠屋があり、客の運搬には、二見の船が使われていた。

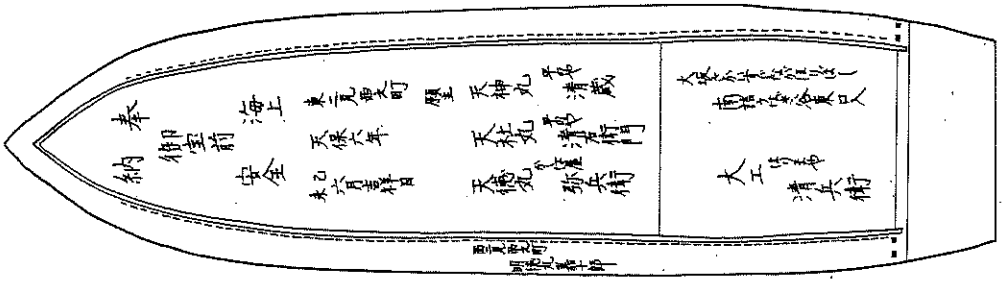
瀬戸内海の小廻船の活躍を伝える資料として、文化財的価値が高い。

底部刻書

奉納　御宝前　海上安全
天保六年乙未六月吉祥日
願主　東二見西之町
天神丸　平のや清蔵
天社丸　平のや清右衛門
天徳丸　かしは屋弥兵衛
西二見西之町
明徳丸　嘉十郎
大坂堺筋長堀橋南詰鰻谷東口江入
大工　はりまや清兵衛


19
43
37
30.5
24
36
10
24
15
24
56cm


208.5
16
12
11
11


奉
納
海上
安全
天神丸
清蔵
天社丸
清右衛門
天徳丸
弥左衛門
大工
清兵衛

御厨神社船模型

御厨神社船模型

御厨神社船模型

御厨神社船模型船底刻字

御厨神社船模型船底刻字

（所見）　　2022年12月26日

出口晶子（甲南大学）

御厨神社の奉納・船模型について

（住所　兵庫県明石市東二見1323）

本奉納船模型は、弁才船系統のなかでも千石船のような大型船とは異なり、紀州や瀬戸内海などにみられた小廻船のイサバの特徴を有する。イサバは、後述するとおり、船首部にその特徴があり、大きさも概ね数十石から100石積級を中心とする。

大型の弁才船では、五尺と呼ばれる、取り外し式の舷側部材が上部にミヨシから直接取り付けられている。それにたいし、イサバのような小廻船では、ミヨシが細くなるため、馬乗立と呼ばれる立て板をミヨシの後方に別途建て、そこから五尺が取り付けられる。つまり、ミヨシと馬乗立の部分が二股になるのが特徴で、本模型では、その特徴がみられる。さらにミヨシと馬乗立の間にはおさえ木の役割をもつ梅模様の飾り彫板がついている。こうした船首の二股は小廻船であるチョキ（猪牙）にも共通するが、チョキは一本ミヨシの先端が細長く、垣立が簡素といった特徴がある。

イサバ関連資料としては、①船図面、②船絵馬、③奉納船模型が確認できる。

①船図面

神戸大学海事博物館や、香川県の瀬戸内海歴史民俗資料館等に少なくとも20点以上保存されている。香川県では、「瀬戸内海の船図及び船大工道具」（2813点）が平成5年（1993）国の重要有形民俗文化財に一括指定されているなかにイサバの船図面が含まれる。

船図面の古いものとしては天保4年（1833）「備中玉嶋川崎菊屋　多蔵舟」の板図がある（神戸大学海事博物館蔵）。岡山県牛窓で収集され、船の発注者は備中玉嶋である。すなわち高梁川と運河でつながっていた玉島港（現在の倉敷市玉島中央）の船で、牛窓の造船所に発注されたものとみられるが、全体に劣化が進み、船首の一部を欠いている[瀬戸内海歴史民俗資料館1986：81、118]。

参考資料：瀬戸内海歴史民俗資料館1986『瀬戸内の漁船・廻船と船大工調査報告』（1年次）、1987『瀬戸内の漁船・廻船と船大工調査報告』（2年次）

②船絵馬

瀬戸内海の船絵馬に香川県引田町（現東かがわ市）山王神社の明治15年（1882）奉納のもの、古いものでは、天保8年（1837）奉納の福岡県津屋崎町、金刀比羅神社蔵のものなどがある。いずれも馬乗立とミヨシは離れており、その間を別材がつけられているのがわかる。

参考資料：石井謙治1983『和船史話』至誠堂：214 - 215

③船模型

香川県琴平町の金毘羅神社に奉納された船絵馬や船模型、流し樽などが、「金毘羅庶民信仰資料」として昭和 54 年（1979）、国の重要有形民俗文化財として一括指定されているなかにイサバの船模型が 1 隻含まれている。

石井謙治 1983『和船史話』至誠堂の写真の船模型と、日本観光文化研究所 1982『金毘羅庶民信仰資料集』1 金刀比羅宮社務所の写真船模型は、破損状況から同じ船とみられる。

石井は、復元寸法を、航長さ 30.7 尺、肩幅 10.7 尺、深さ 3.4 尺、正間石 109 石と推定しており、「明治前期とみられる数少ないイサバ船の 10 分の 1 模型」とし、観察時すでに「破損がひどく、五尺は完全になくなっている」[石井 1983：216]としている。

他方、日本観光文化研究所 1982『金毘羅庶民信仰資料集』1 巻、金刀比羅宮社務所、113 頁　では、文久 2 年（1862）紀州熊野田並浦の天神丸政右衛門が奉納した廻船模型で全長一五八センチ、「文久二年　紀州熊野田並浦　金毘羅大権現　天神丸政右エ門船□□□□□」とある。こちらも五尺が破損しているのが読み取れる。

御厨神社の船模型の文化財価値

御厨神社の船模型は、船底裏側に寄贈者の名や奉納時期があり、全体的に当時の形がよく保たれている。修繕に関する来歴には、永い間神戸商船大学に貸し出しされ、神社に帰ってきたときには痛んでいたため、二見港の船大工・橘栄佑氏が修理をし、それが現在御厨神社に保管されている、とする[大西昌一 2005『ふるさと二見の歴史』：65]。

船体内部の仕切り板や覆い板等が新しい材になっており、修繕されているのが確認できる。幸い、イサバの特徴である船首部分は、国指定の金毘羅神社所蔵のものより保存状態がよく、奉納年代はさらに古い。

明石市の船型模型の文化財は、これまでに住吉神社の大和型船模型とおしゃたか船神事の船模型がある。本奉納模型は、大型弁才船（千石船）にはない、全国でも数少ない小廻船の模型であり、奉納年代も「天保六年（1835）六月」と相対的に古い。

イサバは、基本的に魚、薪、石、雑貨等の荷物を運んだ船だが、大坂から金毘羅参りの客をも運んでいたとみられる。大坂には二見出身の旅籠屋があり、客の運搬には、二見の船が使われた。本模型は、東二見・西二見の複数の船持ちたちによって奉納されたもので、瀬戸内海の小廻船の活躍を伝える資料として、文化財的価値が高いと判断される。

課題

修理時期、修理箇所の観察と聞き取り調査、修理前の古写真等の有無、船体特徴の詳細観察と簡易計測を進めたうえで、指定にむけた審議を進めていくのが適切と思われる。

（3）名　称　　中崎公会堂

所在地　　明石市相生町１丁目 119 番 19

所有者　　明石市

時　代　　明治時代

形　状　　木造平屋建（桁行 12 間半、梁行 8 間）

平入り唐破風玄関付

入母屋桟瓦葺

建築面積　499.33 ㎡

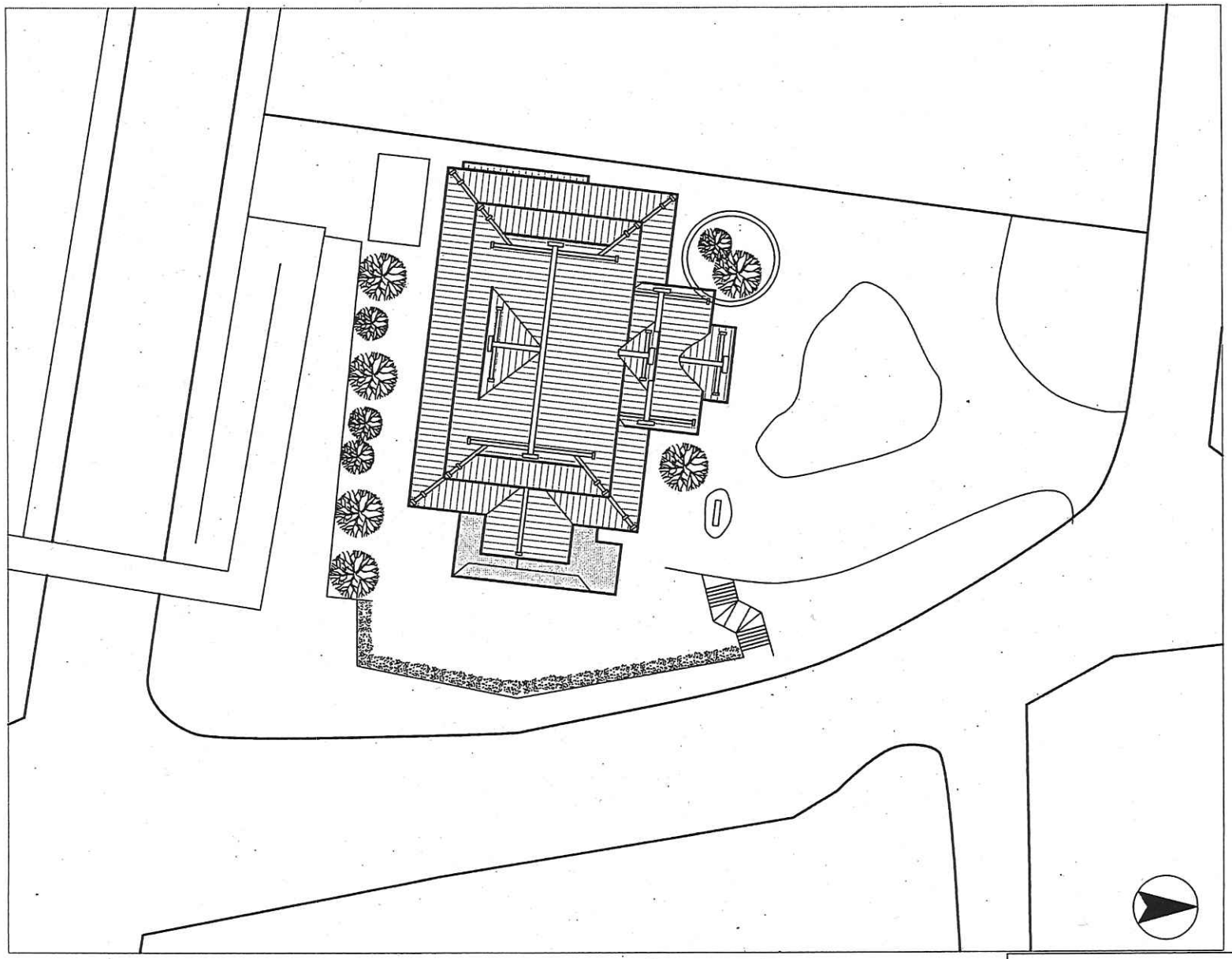
概　要　　明治 44 年（1911）４月に、白砂青松の地である中崎遊園地に建てられた明石市内に残る最古の公共施設である。設計と監督は明石郡出身で当時奈良県技師であった加護谷祐太郎氏が手掛けた。奈良・鎌倉時代の寺院建築様式を取り入れた建物で、小屋組に木造トラス構造を採用して大規模な大広間を構築している。玄関は唐破風の屋根をもち、角柱はエンタシスになっている。天井は二重折上格天井であり、東面に床の間、違い棚、書院を設け、書院には装飾的な花頭窓を設ける。

昭和 57 年（1982）に改修を行っているが、建築当時の姿に整備され、その後の阪神・淡路大震災でもほとんど被害がなく、現在に至っている。

明治 44 年（1911）8 月 13 日の柿落しの講演会で、当時朝日新聞に勤めていた夏目漱石が講演をして以来、数々の著名人による講演会が開催され、現在では、市民の集会所や剣道・柔道などの武道場として広く市民に活用されている。

本建築は、明治 36 年（1903）に建てられた奈良県公会堂と共通するもので、加護谷がこれを範としたと見られ、この公会堂よりも後の大正元年（1912）に竣工した加東市明治館とも構造、意匠が共通している。

様々な時代の様式を巧みに組み合わせ、細部に意匠を凝らした本建築は、明治後半期を代表する近代和風建築として文化財的価値が高い。



中崎公会堂　配置図

中崎公会堂　平面図

中崎公会堂全景

中崎公会堂正面

中崎公会堂内部

指定文化財候補物件について（今後の流れ）

１．明石市文化財保護審議会における指定を妥当とする旨の答申

↓

２．答申を受けて、指定する旨を市長まで確認（市長決裁）

↓

３．指定の告示
　　指定書の交付
　　情報提供（記者発表資料の作成）

↓

４．市教育委員会へ指定の報告

↓

５．国登録文化財解除手続き（中崎公会堂）